新 刊

□勝本 謙：**菌類ラテン語と命名法** 400pp. 1996. 日本菌学会関東支部（発行）. 非売品（申し込みにより購入可能）.

著者は，菌学の分野で，新分類群のラテン語記載文を初めて書く人を対象に，ラテン語文法の初歩の解説と記載文の書き方の手引きとして本書をまとめた，という．本書はラテン語文法の概説，学名の作り方，記載文の書き方，国際植物命名規約と菌類，の4章から構成されており，巻末には菌学用語辞典（ラー英ー和；和ー英ーラ）つけられ，あとがき，事項索引，菌類学名索引がある．菌学用語辞典には多くの用語が採録されていて，225ページあり，本書の半分以上を占めている．このような構成から見て，本書は最近の関連の図書の中では，豊国秀夫植物学ラテン語辞典よりもStearn, Botanical Latain に似ている．しかし，国際植物命名規約に関する部分を加えていることは本書の特色である．

本書は特に菌学と銘打ってあって菌類研究者を読者対象と想定している．実際に菌類への学名の適用は特有のものもある．国際植物命名規約（東京規約）の第6章は第59条「多型的生活環をもつ菌類の学名」だけからなる菌類に特有の条項から成り立っていてる．しかし，菌類の学名は植物や原核生物ラン藻類の学名と同じ規約の下で扱われるので，本書の内容は広い（旧い）意味の植物全体に通用するものとなっている．第1章ラテン語文法では記載に必要な範囲でラテン語文法が簡潔に整理されている．第2章学名の作り方と第3章記載文の書き方では，属名や種形容語あるいは記載文を菌類を例にして挙げてあり，丁寧な解説が付けられていて分かりやすい．第4章で扱っている命名規約は，現行の東京規約に基づいている．しかし，タイプの種類と指定（p. 123）のところで，著者はエピタイプ epitype について紹介すべきであったと思う．エピタイプは東京規約においてつけ加えられた重要な変更点の一つで，第9.7条に規定された，全く新しいタイプの概念である．エピタイプはホロタイプ，レクトタイプ，ネオタイプをはっきりと引用したうえで指定しなければならないが，既存のタイプに基づいては学名を正確に適用できない場合の解釈のためのタイプであり，今後学名の適用の根拠をより一層明らかにする場合に役立つはずである．

著者勝本博士は1994年末から約半年間で原稿をまとめたとまえがきで書いておられる．しかし，本書には著者の長い研究生活の間に蓄積された学名と命名法に関する蘊蓄が各所に盛り込まれている．記載文の書き方の中に含められている例文の選定，第2章学名の作り方の中の「主要属名の意味」，命名規約条項の菌類への適用例の選び方，菌学用語辞典の豊富な内容など著者が長い間こつこつとノートを書きためてきた結果を生かしたものに違いない．著者は「おわりに」で，「ラテン語で新分類群の記載文を書くことは決して難しいことではなく，ラテン語文法の基礎を学んで正確に言葉を選び，格による語尾の変化に注意すれば，誰でも正しい記載文が書けるといってもよい」として，9項目の心掛けるべき点を挙げている．若い研究者に勧めたい．私もいくつかは著者と共通のものを心掛けてきたが，教えられる点も多い．言葉を正確に選ぶことは正確な言葉遣いの文章を学ぶとよい．著者の簡潔明瞭な日本語とラテン語の文章は見習うべき実例といえよう．学名は生物学者が育てた文化であり，命名法は生物学の基礎として重要である．しかし，それらに関する著書は数少ない．菌学研究者にだけではなく，植物学研究者に広く推薦したい．

本書は非売品となっているが，日本菌学会関東支部（山岡祐一幹事）（305 つくば市天王台1－1－1 筑波大学農林学系 Tel. & FAX 0298－53－6708）に申し込めば，￥2,500 で購入できる．内容の価値に比べると驚くべき廉価である．著者も発行者も経済的利益を考えずに，学問への情熱とサービスで刊行したことと思う． （大橋広好）